

変わるマチの輪郭 第3部



③

広域で重度障害者支援

恵庭市にある放課後等デイサービス「ポンペえにわ」。平日の午後2時を過ぎると、送迎車で到着した子どもたちでにぎやかになる。南幌養護学校（空知管内南幌町）小学部2年の神瑛太君（8）も早速、電子キーボードで遊び始めた。

身体障害や知的障害のある子どもたちの児童発達支援事業、放課後等デイサービスなどを札幌市内で展開する社会福祉法人「榆の会」（厚別区）が2010年7月、札幌市外で初めての事業所として開設した。看護師や保育士、作業療法士らがそろい、たん吸引など医療ケアが必要な子どもも利用できる。

保育士の田口智子さん（55）は「重度の障害がある



社会福祉法人「榆の会」が札幌市外で展開する施設の位置

連携に光

子どもたちに特化した居場所が少なく」と語る。現在は放課後等デイサービスと、未就学児を対象とした児童発達支援事業を合わせて北広島、千歳、恵庭の3市から計15人が利用する。

「最適な施設を」

担当医の紹介で榆の会を知り、1歳から週2、3回通う神君の自宅も北広島市にある。放課後は南幌養護学校から恵み野駅までの送迎バス、駅からはポンペえ

にわの送迎車を乗り継いで通う。

神君は生まれつき骨や筋力が弱く、白内障や知的障害もある。北広島市内にも放課後等デイサービスはあるが、母親の美佳さん（39）は「集団行動が苦手な骨折をしやすい瑛太には、少人数のポンペえが合っている。職員も小さいころから知っ

お気に入りの電子キーボードで遊び、笑顔を見せる神瑛太君（恵庭市のポンペえにわ）（藤井泰生撮影）



ているので安心できる」と話す。

榆の会の加藤法子総舎施設長（57）は「障害がある子どもに適した施設が、近くにあるかいないかが成長に大きく関わる。他にも子どもがいたり仕事があったりして、札幌まで通うのが難しい保護者の思いに添えようと思った」と開設の狙いを語る。

札幌の資源活用

自治体の枠を超えた榆の会の動きに注目したが、恵庭市に隣接する空知管内長沼町だ。会に働きかけ15年4月、町総合保健福祉センター内にポンペえにわのサテライトを誘致した。

ポンペえから週2回、理学療法士や保育士が派遣されるため、多様化、複雑化している。「医療機関や専門職が集まる札幌の社会資源を生かしながら、札幌と周辺自治体との連携がますます求められる」。戸田さんは言葉に力を入れた。

人が利用している。町が負担するのは、スタッフの交通費など年間約30万円。町保健福祉課子ども支援係長の酒井智也さん（42）は「町が独自に理学療法士を雇い、同じ環境を整えようとすると年間20倍の費用がかかり、実現は難しい。榆の会との連携は、町民が安心して暮らせるまちづくりのために非常に有効な手段だ」と言い切る。

石狩管内で障害者の広域的な相談支援体制を目指す「障がい者相談支援センター夢民」（札幌）の戸田健一代表（50）は「榆の会のような取り組みは、まだまだ」と指摘する。

重度障害者の福祉サービスは、医療的ケアの有無など一人一人のニーズが異なるため、多様化、複雑化している。「医療機関や専門職が集まる札幌の社会資源を生かしながら、札幌と周辺自治体との連携がますます求められる」。戸田さんは言葉に力を入れた。



放課後等デイサービス 障害のある主に6〜18歳の児童生徒が、放課後や学校休業日に通う施設。2012年の児童福祉法改正により設置された。ポンペえにわのように生活能力向上のための機能訓練を受けられる「療育型」、宿題や遊びをして自由に過ごす「学習保育型」、運動や絵画に特化した「習い事型」などがある。利用料は原則1割が自己負担で、残りは国、都道府県、市町村が負担をする。